

# 冬の幼稚園

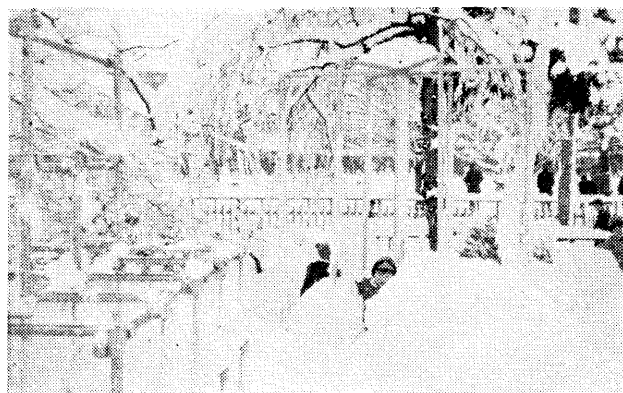
—雪の中に育つこどもの姿—

秋田大学付属幼稚園

冬じたく

「そろそろ寒くなってきましたので椅子ふとんを使いたいと思います。つぎのような大きさのものを作ってください。椅子があまり高くならないようになるべく綿をうすくして、……防寒用の服装—手袋・オーバー・防寒帽子などの準備もお願いします。これらのものを身につける操作もうちで練習させてください。」

こんな手紙が家庭に出されるのは十一月中旬、園庭のいちじょうの



葉が散りしく頃である。この頃になると部屋にはストーブが入れられ、玄関にはよしずの囲いがなされる。去年の大雪の時屋根からのなだれで倒れそうになった東側の廊下の外には丈夫な板の囲いでもしなければ、——床下の水道の鉛管のところはむしろでかこって、——など幼稚園はこのところ冬じたくで忙しい。また幾月かは雪にとぎされておとなは少しゆううつになるがこどもたちは、「早くそりを出してね。」「ぼく、スキーやれるよ。」と目をかがやかして冬を待つ。冬を健康で過ごすようにと、戸外の遊び、栄養、うすぎの奨励、うがいの励行などずいぶん努力してやっていたが、こどもたちはこの冬を元気にやっていけるだろうか、ひよわな数名のこどもたちの顔を思い浮かべながら少々心配になってくる。

## 雪の造形

降っては消え、降っては消えの天候が幾度かくり返されて一月頃になると本格的な雪の季節となる。ひそやかに音も聞こえなかったのに朝起きてみると木も屋根も綿をかぶったような雪景色。たれさがった松の雪を一握り握ってみると手のあとがついてかたまる。今日の雪は何かになりそうだと、こどもたちの楽しい造形活動を心に描きながら登園する日が幾度かやってくる。

こんな日はあたたかい毛糸の手袋に雪帽子といういでたちで、雪の園庭のあちらでもこちらでも雪の玉を作りはじめる。雪の具合がいいと、はじめは握りこぶし大の玉が、ころがし歩くうちにみるみる大きくなって径一米をこえ、とてもひとりでは運べなくなってしまう。

「だれかきてー。だれかきてー。だれかきてー。」と助けを求める声がそここですると力の強い男の子たちが走って行って、大勢でおしてくる。この大きな玉の上にもう一つ雪の玉をのせ松の小枝や松ぼっくり、炭などで顔をかき。おこった顔、笑った顔、やさしい顔でだるまはこどもたち



ちに話しかける。あり余る材料でいくつもいくつも作って並べると、大小の雪だるまは道行く人にまでいろいろな表情で話しかけてよろこばれる。

象・キリン・馬などの動物も雪の玉さえ作れば簡単



にできる。大きな雪の玉を三つ四つ続けちよつと手を加えると胴体となり、それに首になる玉を上へのせ形を直し、耳・目・口などをつけると立派な動物ができてあがる。こどもたちは、空かけるまほうの馬や、さばくを走るらくだにのって、はてしなく夢を描く。

こどもたちがふんだんにある雪を思う存分駆使して、身も心も満足した遊びに楽しいひとときをすごすのを、そしてその遊びの中で友だち同志がお互いを知り合い助け合っいていく姿を教師はこの上なく好ましいものに思うのである。

### 雪のあそび



雪の上の遊びには健康的なものが多い。その一つにそり、遊びがある。曲げ木で作ったそりで、築き山から滑走したり、広い園庭を十五台のそりを一列に並べて走るさまは壯観である。二人組となり、ひとりが腰かけひとりがおして走る。時々交代するので疲労の点も救われる。

雪をふみつぶした土俵ですもうもはじまる。審判得意のA君が松の枝を持って行司役。

「ヒガーシー、朗川。」  
赤平山、赤平山。

赤平山がおされて雪に尻もちをつき朗川のかち。に

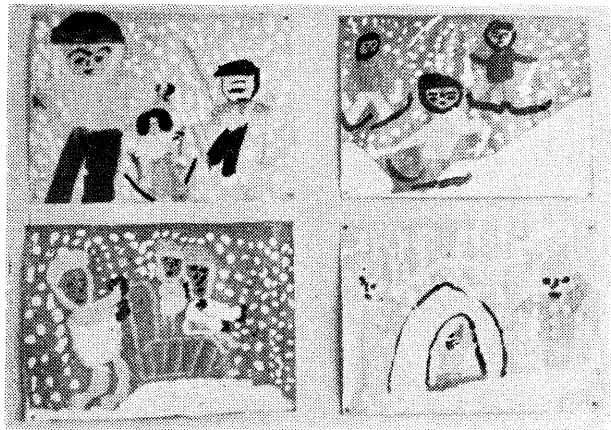
ここに笑って賞品係のB子から大きな雪のデコレーションケーキをいただく。

雪でボール大の玉をたくさん作り雪合戦がはじまる。前年の体力測定で劣っていた投力を向上させる為にもこの遊びは大いに奨励する。

胸から上はねらわないこと、はじめとやめの合図を

まもること、少しぐらい痛く玉が当たっても泣かないでがまんすること、などは遊びの間に自然に生まれたルールである。

こんな雪の遊びの絵画表現はまた生き生きとして楽しいものばかりである。



ふぶきの日

ものすごいふぶきの日は十分ぐらい外を歩いても全身が雪にまみれて雪だるまのようになってしまう。こんな日の教師は、すき間から廊下にはいつて来た雪を掃き捨てること、どんどん火をたいて子どもたちが登園する前に室内をあたたためること、ぬれたオーバーや手袋・靴をかわかすことなどで忙しい。ふぶきの中を元氣よくやってきたA君を大いにほめ、つめたくて今にも泣き出しそうなB子をあげましてオーバーの雪をはらってやる。

こんな日は外にも出られないので室内に冬ごもりである。あたたかいストーブのまわりに集まってなぜなぞ遊びもまた楽しい。

「鼻の長いものなあーんだ。」

「ぞう。」

「首の長いものなあーんだ。」

「キリン。」

と長いものばかりいうC君。

いつもテレビの「ジャングル」を愛覧(?)しているD君の問題

「ジャングルで一番強いものなあに。」

「ライオン。」

「ちがうよ。虎ですよ。」

「ちがいます。ぞう。」

これにはめいめい勝手な答が出てしまう。

E子「まるいものなあに。」

「お月さま。」

「ちがう。」

「おひさま。」

「ちがう。」

「こうさん。」

E子「わたしのおふとん、昨日おかあさんが作ってくれたの。」

「まあ。」

幼い子どもたちの作るなぞはふき出したくなるほどおかしい。自分中心の、自分だけがよくわかるものが多く出てくる。それに条件が一つしか出されないものが多いので、たいていのものがあてはまり、つぎつぎといろいろな答が出される。何でもくったくなくものをいわせようと目的の場合はむしろこんななぞが好適であろう。

思考力もつげなくては、と教師のとおっておきのなぞを一つ二つ出す。

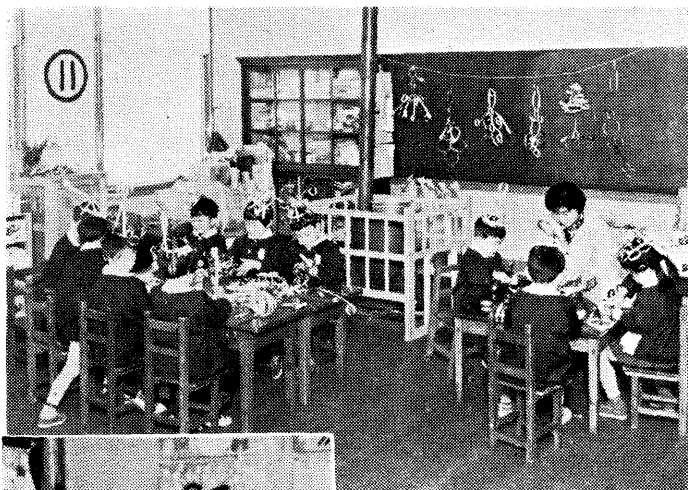
1、耳も鼻もなくて口だけあるものなあに。

2、枕をたくさん並べてねているものなあに。

教師の提案「なぞなぞでいろいろなことを心で考えたから、今度は少し手の方で考えましょうよ。」

「ハイ。」「ハイ。」

手で考えること——それは何かを作ったりかいたりすることであるということをごどもたちは了解済みである。積木や組木、色板やタイル・石・洗濯ばさみなどなどの構成遊び、アートテープの構成



もよろこんでする。一隅ではあやとりなどもはじまる。



### 遊戯場で

屋内では運動不足になりがちなので、体をじゅうぶんうごかして暖をとるような遊びを工夫しなければならない。

1、蛇ごっこ（これはこどもの創作）

つなの両端を二人で持ち、つなを床につけたまますばやく左右にうごかす。蛇が地面を走っているようである。この蛇の上をみんなでとび越えて遊ぶ。

つなを持ったこどもが時々「蛇だぞー!」

とおどすので、みんなはキャッ、キャッ、とひめいをあげるとび越えていく。

2、波ごっこ（これもこどもの創作）

蛇ごっこはつなを横にうごかすが、これは上下にうごかす。

最初はさぎ波程度なので、どんなことともとび越える。波はときどき高くなるのでおもしろい。



3、輪とび、輪まわし

大小の藤輪とうりんを床において輪から輪へ両脚とびや片脚とびをしていく。

うでで輪をまわして遊ぶ。

#### 4、登山ごっこ

高い富士型滑り台の一方からかけあがって行って一方から滑りお  
りる。

二組にわかれ、両方からかけあがって上でジャンケンする。負け  
たことは降参して勝ったことものの後にしたがつて滑りおる。

#### 今日の給食

赤い帽子をかぶった当番のこどもたちが、鈴をならしてみんなに  
昼食を告げると、かなり運動量  
の多い雪遊びなどで空腹になっ  
ているこどもたちは、よろこん  
で集まってくる。

手洗い、うがいをすまして各  
自の食卓へつく。

今日の献立では、あたたかい  
シチューにメンチボール、マカ  
ロニーのケチャップあえ、それ  
に一〇〇グラムのパンである。

ざつと六五〇カロリー。まず栄  
養満点というところ。

「おかわりください。」「おかわり  
ください。」「おかわりください。」



と食欲も旺盛である。冬の食事の第一条件はまずあたたかいもの  
であること、つぎに脂肪分にとむこと、有色野菜をとることなど  
であろう。それに適度の空腹はこどもの食欲をまし、どしどし食べて  
くれるのでうれしい。

私どもの日々の教育のいとなみも、ほんとうに雪国のこどもたち  
の心と体の成長のかてとなる内容をもち、こどもたちが生き生きと  
意欲をもってそれにたちむかってくるようにしたいものである。

#### 春を待つ

雪の日を元気に遊び、おいしい給食を幾度か食べているうちに雪  
にうずもれて姿をかくしていた園庭のジャングルも鉄棒もその全身  
をあらわしてくる。まだらに残る園庭の残雪の中をこどもたちと春  
をさがしにでかける。窓下の円木のあたりで、はずんだ声が

「先生、草、草、早くきてよ——。」

こどものよろこぶ声をよそに、雪国の春はなお遠く、ほんとうに  
春のおとずれるのはこの子たちが入学してからである。